

講演③：「内モンゴルにおける日本語教育の現状」

エルドンバートル（内モンゴル大学外国語学院教授）

1. はじめに

周知のように、グローバル化が進む現在、中国の改革開放の成果による周辺国との関係改善及び中国経済の急成長により、東北アジア諸国——中国、モンゴル国、日本、韓国そしてロシアの各分野における関係がますます緊密になっている。その中で中国と日本の関係は重要な位置を占め、東北アジア全体の関係を調整するうえで大事な役割を果たしてきた。こうした時代背景と現状のもとで、中国の北方に位置し、モンゴル、ロシア、日本、朝鮮半島などの国、地域を連結する地域的な優勢を持ち、民族性の豊かな地域である内モンゴル自治区では、日本語教育がより盛んに行われ、日本文化に対する関心も極めて深くなっている。日本語教育は、日本との交流の担い手を育てるものであり、日本理解の媒体的な役割を持っているから日本語教育において、日本語を駆使できる総合的能力を持ち、言語の背後にあるその文化を理解できる人材を養成することが極めて重要ではないかと思われる。だが、管見によれば、今日の内モンゴルにおける日本語教育は、かなり成果を上げてはいるが、偏見的教育方法、功利主義に偏る教育理念などの原因により、日本語学習者は、正しい日本語が話せない、正しい文章がかけないなどの問題が存在している。そこで、今回は本人の日本語教育実践と観察に基づき、内モンゴルの大学における日本語教育の現状及び日本語教学方法、教学改革などについて検討してみたい。



2. 日本語教学の現状

内モンゴル自治区はモンゴル族を主体とする少数民族地域である。自治区各大学でモンゴル族の大学生は一定の割合を占めており、ほとんどの大学では、英語の外、日本語を必修科目として学んでいる。近年以来、より多くの日系企業が中国に進出していることと内モンゴルの日本留学ブームに従って、日本語を学ぶ学生の数が増えている。

実は、一九七九年、中国文部省の承認により、内モンゴル自治区で初めて内モンゴル大学日本語学科が設立され、言語と文化を中心に発展してきたのである。内モンゴル大学日本語学科は、中国国家「211プロジェクト」大学と国の重点大学として認められている内モンゴル大学に所属し、中国の少数民族地域においてもっとも早く設立された日本語教育機構であり、その30数年にわたる運営において、中国の少数民族地域における数少ない日本語学科として認められている。現在、中国日本語教学研究会の理事機関の一つとして、中国西北地域における日本語専攻の人材を養成する重要な基地になっている。その教学分野としては、総合日本語、高級日本語、日本語概論、日本文学、日本文化、経済貿易、中日対訳、通訳、同時訳などの科目が設けられてある。2003年中国文部省より本学科は、日本言語文学の修士学位授与権が認定され、2004年より大学院院生を正式に募集している。研究分野としては、主に日本言語学、日本語文法学、日本文学、日本文化、日本社会などにわたっている。現在、毎年学科生500人ぐらい、院生20数人ぐらい勉強している。学生は、ほとんど内モンゴル出身だが、寧夏自治区、新疆自治区、湖南省などの各省からも来ている。

内モンゴル大学日本語学科は、この数年間、国際交流と研究のネットワーク作りのため、日本の早稲田大学、東京外国語大学、千葉大学、東洋大学、横浜大学、大阪大学、立教大学、宇都宮大学、関西国際大学、岐阜大学、九州共立大学、九州女子大学などの大学と協定を結び、留学生の交換、受け入れ、教員の派遣、共同研究などの活動を展開していることによって、研究者たちの間に、多文化に関する交流や現地調査や先端研究のネットワークが形成されつつある。

内モンゴル師範大学では、2003年日本語学科が設立され、モンゴル語で日本語を授業することに力をいれ、学科の総体計画、課程及び教員の面でモンゴル語で授業することを重視してきたのである。現在、在学生122名いる。

そのほか、内モンゴル師範大学教育学院日本語学科、内モンゴル民族大学日本語学科、内モンゴル創業学院日本語学科、内モンゴル民族高等専門学校日本語学科、内モンゴル外国語教育専門学校などにも日本語学科が設けられている。日本語学校としては、内モンゴル外国語専修学院、中村日本語教室、赤峰日本語学校など17校があり、大学と日本語学校を合わせて毎年4000人ぐらいの学習者が日本語を学んでいる。

以上の状況で見ますと、内モンゴルの日本語教育は、近年以来学校及び学習者の数が増え、学習内容も豊かになり、かなりの成果を上げてはいるが、留学ブーム、ビジネスブームなどの原因で、多くの日本語学校の教師達は、金銭に目を向け、研究プロジェクトを偏重し、語学の質を向上させることにあまり力をいれていない傾向がある。学習者の側から見れば、一部分は、日本語学習への認識が不完全で、自覚的に学習する積極性が欠け、学習の目的が近視的になっている。教学プログラム通りに勉強を進め、試験に合格し、単位さえとって卒業できれば、それでしまいたいと思うものもいる。一部分の学生は、日本語学習は単なる日本への留学あるいは日系企業に就職するためのものであると考えているようである。

本人の日本留学中の調査によれば、内モンゴルの普通の日本語学校出の学生はともかく、大学の日本語学科を出た学生でさえ日本人と自由に交流できるのが少なく、ヒヤリングと話す力が弱くて、表現が中国語式である者は少なくない。これは、内モンゴルの日本語教育のある欠点を物語っている。

3. 日本語教学における若干の問題とその対策

既述の日本語教育現状に基づき、本人は自分の担当している日本語学科の生徒達に対して行ったアンケートの結果をまとめると以下の通りである。

①通常通りの授業に対して満足か非満足かという質問に対して、満足或は基本的には満足という学生は50%であり、非満足という学生が30%を占めている。これは慎重に考えるべき問題であり、大学日本語教育を改革する必要があることを物語っている。答えの理由から見れば、満足していると答えた学生の大部分は、大学卒業後日本へ留学或は日系企業に就職する計画を立てている学生であり、その学習の目的もはっきりしている。満足していないと答えた学生達の多くは、学習目的が曖昧であり、或は自分が日本へ留学しない、日系企業にも就職しない、ただ、試験に間に合い、卒業証書さえもらえれば、それで結構だと考えている学生達である。

②教学の質については、教育内容・形式が古いなどの意見が出されている。

以下これらの問題について本人のいくつかの考えを述べてみたい。

①日本語教学に不満足 of 学生が50%であるということは、同じクラスにまじめに授業を聞かない学生がかなりあるということを意味している。こういう状況は、もちろん授業の質には影響を与えるわけである。この問題を解決するためには、二つの方法が考えられる。その一は、学生の実際の状況に基づいて、甲乙二クラスに分け、卒業後日本へ留学或は日系企業に就職する学生には個別授業する。このようなやり方によって、次の問題が避けられると思う。つまり、授業の内容を深くすれば、基礎が浅い、努力しない学生は理解できなくなる。簡単な内容を授業すれば、

基礎がしっかりしていて、熱心に勉強する学生の語学力が延べなくなるということが避けられる。第二は、多様化的な授業を受けられるチャンスを与え、自分が興味を持っている科目或は必要としている科目を自由に選択できるようにさせ、彼らの積極性を引き出すことである。

②授業の内容・形式に対しては、いち早く改革を行うべきである。現在、多くの大学では、依然として文法法・翻訳法のやり方を取り、文法分析及び日本語と母国語間の対訳に重点を置き、文法規則を暗記することは日本語を把握する近道だと見ている。具体的に言えば、教師が生徒達に日本語の文法規則を教え、単語帳と例文を提供し、単語の練習と短文の練習を通じて文法規則を学び、その後、母国語に訳すということである。この教学法は、文法知識を中心に教え、学生の読む力と翻訳力を養成して、彼らの理解力と分析力を伸ばす伝統的教学法として、それなりのメリットを持つてはいるが、その反面欠点もあるように思われる。というのは、それは、口語教学・音声（特に漢民族の学生には、発音がうまくできない学生が多い）・語調の教学をあまり重視しないからである。日本語専攻の多くの学生達は、日本に留学して、日本人と直接言語交際する時、日本人が彼らの話を聞き取りできない、或は彼らが日本人の言語表現を理解できない場合が多く見られる。これはどうしてであるのか。これは、詰め込み主義的な教学法と一定の関係があるのではないかと思う。だから、学生の言語交際能力の育成を目標とする交際教学法を受け入れ、教師中心の古い教学法を生徒中心の教学構造に取替え、学生の学習主动性を激発するやり方はひとつの取るべき方式ではないかと考えられる。この方式には、直接学習、直接理解、直接応用という三つの内容が含まれる。授業する時、日本語を用い、学生の聞き取りと話す力を養成する事に力をいれ、言語のリズム、発音の正しさを重視する。そして、文法語彙を教える時、できるだけ日本語で説明し、日本語で質問を出して、学生達には口頭日本語で答えてもらう。または、教員は、日本語の授業をする一方、日本の風俗習慣（言語習慣を含む）、新聞記事などを紹介し、学生にはその感想を話し言葉で言ってもらい、実際の言語交際中文型及び文法構造を覚えてもらう。そうすると、より短い時間で学生の聞き取りと実際に言語を駆使する能力を伸ばすことができ、まじめな模倣訓練を通して、学生に正式な日本語、正式な日本語リズムを覚えてもらうことが可能であり、学生達の日本人と実際に交流するときのコミュニケーション能力がより早く伸びられるように思われる。

作文の訓練も日本語を学ぶ一つの近道だと思う。作文を通して、学生が文法をどれぐらい把握しているか、どれぐらいの語彙を覚えているか、その語学力がどのぐらい伸びているのかといったことが判断できる。それによって学生達の学習の進み具合が分かるし、教師達が相応の対策を取るに役立つ。具体的にいうと、学生達に日本語を用いて、毎日日記を書いてもらい、できれば毎週一篇の小論文或は随筆を書いてもらう。教師達はまじめに見てあげ、その間違いを指摘してやり、生徒達が正式な日本語で文章を書けるように指導する。このようなやり方は、学生達に既に学習した文法構造及び単語を実際に使いこなせ、彼らの印象を深め、記憶力を固めるには役立つ。そして、彼らの日本語を用いて物事を考える能力を高め、その日本語表現力を全面的に上げることには、非常に重要な役割を果たせるように思われる。

学んでは使い、日本人と実際にコミュニケーションを行う視点から考えてみれば、現在の多くの日本語学校及び大学で使っている、教科書の文型を無理やりに暗記させる教学法には柔軟性が欠けている。外国語としての日本語の教学という視点から考えてみれば、学習者の目的とニーズが多様であることはもちろんである。だからすべての学習者に対して、単一的な柔軟性のない

教学法を取ってしまえば、その効果あまり高くない。教科書的文型の教学法と実際の交際活動をどのようにして結び付けるかということは日本語を教える時考慮に入れなければならない課題である。学生が社会に出て、日本人と実際にコミュニケーションを行う時、教科書的文型を使って会話するとは言い切れない。例えば、日本語の文型教法で、「これは何ですか」「それは本です」というのは、典型的な文型教法である。だが、実際に言語交流を行う時、このような文型があまり使われない。例えば、

A: (自分の机の上に明らかに自分のものではない書類が置いてあるのを見て。看到被放在自己桌子上的书) これはなんですか。(这是什么?)

B: あっ、ごめんなさい。さっき電話した時に置いて、そのままにしちゃったんだ。いま、どけますから。(啊, 对不起。刚才打电话时放那儿的, 这就拿。)

A: (Bに頼んだワープロの手紙が自分の指示したとおりに出来ていないのを見て、Bに。看到让B用打字机写出来的信件不是按照自己的指示说) これは何だ?

B: はい、すみません。(对不起!)

A: (テーブルの上ケーキの包みがあるのを見て。看到茶桌上的水点心) これ、なあに?(这是什么?)

B: ああ、それ、今お客様にいただいたの。(啊, 那是, 刚刚客人给送的。)

この実例を見て分かるように、実際に言語交流をする時、「これは何ですか」「それは本です」という文型はあまり使われない。だから、教師が日本語の文法を教える時、学生の聞き取りと会話の能力を高めるため、日常生活の会話を扱っている教材をもテキストとあわせて使い、日本人の物の考え方と言語習慣、表現方式及びその文化的背景と結び付けて説明するべきだと思う。というのは、言語というものの背後にはその民族の文化があるからである。学生達には、より正確に日本語を使いこなしてもらうためには、日本語の言語環境、文化及び風俗習慣の知識が求められる。だから、日本文化、風俗人情に関する知識を教えてやり、彼らにもこの方面の本を読んでもらうことが必要である。日本人の話し方には、省略的に表現することが多く見られる。話の半分を言い出して、残りの半分以上を省略する言い回しをする場合が多い。日本の文学作品或は日常会話の中では、このような言い回しが多く見られる。このような表現方式は、日本人同士の間では、相手の言いたいことがすぐ理解できるが、中国の学習者にとっては、理解上の困難をもたらすわけである。時には、文化的摩擦を引き起こす場合もある。周知のように、言語は文化の産物である。だから、学生に日本語の表現方式を正確に理解してもらい、日本人とのコミュニケーションをうまくさせ、日本文化を正しく理解させるためには、日本語の独特な文化背景と結び付けて日本語を教学する必要がある。そして、日本人の行動様式、物事の考え方、言語習慣を学生に知ってもらうことは、学生達が、日本語をよりよく理解して掌握できるには極めて重要である。

4. 終わりにかえて

近年以来、中国の改革開放、経済発展、日本企業の中国への進出にしたいが、日本語の人材に対する各分野のニーズがますます増えている。このような社会背景の下で、その国情に適切して、実際の効果がある日本語教学法を作り出すことは必要である。言語というものは、社会の発展にしたがって、変遷するものであるから言語教学もその時代の変化とともに改善されていくべきであり、固定した古い教学法を詰め込むやり方は、時代の要求に通用しないように思われる。日本語の教学法には様々なやり方があるのだが、日本語教師は、それぞれの長所を受け入れ、具体的条件と学生の実際情況に基づき、学びと実用を結び付けた教学法を取るべきである。それによって、日本語教学を幅広く展開し、日本語教学のレベルを総体的に向上させて、学生の各種の能力を養成していけば、より質の高い、素質のある外国語人材が育てられるのではないと思われる。

現代社会、国際情勢の視点から考えてみれば、しっかりした文化的教養のある、学際的知識能力と敏感な国際的感覚を持つ複合型の人材を育て上げることは教育の目標ではないと思われる。だから、外国語教育者にとっては、外国語教育とは何かという根本問題を頭に入れて外国語教育にたずさわることが望ましい。

質疑応答

Q1 日本と中国の間の最近の状況が、内モンゴルの学生や日本語学習に何か影響をもたらしているか。

A1 学校の授業には関係ない。依然として日本語学習へのニーズは高い。

Q2 抱えている問題・解決策を紹介していただいたが、今実際にその解決策を実施しているのか。特に“学生に個別授業をする”という方法は、理想的ではあるが、大学として物理的に可能なのか。

A2 今は教師間で意見を出し合っている段階。問題も多くありなかなかすぐには実施に至らないが、望ましい形に向かって議論を進めている。

Q3 内モンゴル大学以外の大学についても情報をいただけたが、これらの情報はどうやって調べたのか。

A3 各大学の教師から状況を調査した。

Q4 内モンゴルの中の大学教師同士が交流する場はあるのか。

A4 ある。勉強会や情報のやり取りを行っている。

Q5 内モンゴルの教師と、ほかの地域の教師同士が交流する場はあるのか。

A5 一昨年から1年に1回シンポジウムを行っている。その他の機会は個人的な交流以外はあまりない。